

# 遊女考

—『法然上人行狀絵図』・『和漢朗詠注』—

中村直美

## 〔抄録〕

従来、遊女の研究は近世の遊里・遊郭を中心としたものが多く、古代・中世の遊女については概略的に述べられることが多かった。その中で、起源や身分などについてさまざまな考察がなされるものの、資料の限界もあり、必ずしも見解の一致をみていないのである。

近年、末法後のいわゆる鎌倉新仏教の祖師達が、女性や非人、悪人の救済を自らの重要課題としていたことが明らかになりつつある。その中の一つとして『法然上人行狀絵図』巻三四の遊女教

化の場面はよく知られている。しかしながら、そこに登場する遊女の姿は真に理解されてきたのかという疑問が生じるのである。そこで、これまで取上げられることはなかったものの、遊女の記述を有すと考えられる『和漢朗詠注』に注目し、遊女の様相について、若干の言及をするものである。

キーワード 遊女、法然上人行狀絵図、和漢朗詠注

## はじめに

従来、遊女の研究は近世の遊里・遊郭を中心としたものが多く、古代・中世の遊女については概略的に述べられることが多かった。そのため、近世の遊女のイメージが古代・中世の遊女に及んでいた。その結果古代・中世の遊女について、近世の遊女同様、社会底辺に位置す

る卑賤視された存在であったと考えられてきたのである。

そうした状況に一石を投じたのは滝川政次郎氏であった。<sup>(1)</sup>氏は、まともしては述べられることはないが、散見する確かな遊女の資料を調べ、古代・中世の遊女の実態の解明をされたのである。この滝川氏の研究を踏まえる形で、最近では網野善彦氏・後藤紀彦氏・五来重氏・脇田晴子氏<sup>(5)</sup>による研究が相次いで発表された。滝川・脇田両氏は、平安後期

大江匡房によって著された『傀儡子記』に見られる。

不耕<sup>一</sup>二畝田、不採<sup>二</sup>一枝桑、故不<sup>レ</sup>属<sup>二</sup>渠官、皆非<sup>二</sup>士民、自限<sup>二</sup>浪人、上不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>王公、傍不<sup>レ</sup>怕<sup>二</sup>牧宰、以無<sup>レ</sup>課役、為<sup>二</sup>一生之業、<sup>一</sup>という部分を主な根拠として、律令による統制を受けない「法外の民」「化外の民」として遊女や傀儡を把握。後代ほどではないものの、卑賤視の対象であつたとされた。<sup>(6)</sup>

一方、網野・後藤両氏は、平安末から鎌倉期にかけて遊女や白拍子などあそび者を母に持つ貴族が数多く存在することや、傀儡が給田を国衙から保証されていることを例にあげ、遊女や傀儡は決して卑賤視されておらず、職人身分として、供御人や神人と同様の身分をもつ者であつたとされている。<sup>(7)</sup>

このように、古代・中世の遊女の起源や身分などについて様々な考察がなされているものの、資料の限界もあり、必ずしも見解の一致をみてはいないのである。

また近年においては、末法後に興隆した鎌倉新仏教の祖師達がほぼ共通して女性や非人、悪人の救済を自らの重要課題としていたことが明らかに becoming つつある。その中の一つとして法然が「世ニタクヒナキ悪人ナレ共、南無阿弥陀仏トトナヘイレハ、一念ニテモ、決定往生ヲトケ候ナリ」といい、女性の「不浄」を否定した、遊女往生譚は非常によく知られている。しかしながら、そこに登場する遊女の姿は真に具体的に理解されてきたのかという疑問が生じ、またそれは謡曲「江口」などの遊女も同様であり、それら人々の実態の理解なくしては作品の理解には及ばないのではないかと考え、若干の言及をするもので

ある。

『法然上人行状絵図』巻三四に登場する水辺の遊女の理解は、『梁塵秘抄』、『遊女記』といった作品と絵との照らし合わせによって理解されてきた。しかし、今まで言及されてこなかった『和漢朗詠注』の中には古い記述があり、小稿はその遊女の記述をふまえた上で定義することを目的とする。

# 一

法然は、建永二年（一二〇七）二月四国に配流されている。この配流は、前の年の十二月に後鳥羽上皇が熊野臨幸中に、留守を守らねばならない院の女房たちが、門下であつた住蓮・安樂が催した六時礼讃に結縁し、出家したことによる。

知恩院所蔵の『法然上人行状絵図』<sup>(8)</sup>（所謂法然伝における『四十八巻伝』、又は後伏見上皇が勅をもつて集成せしめたため、浄土宗では『勅修御伝』とも。）によると、建永二年二月九日に住蓮・安樂の処罰が決定し、安樂は六条河原で死罪となつたが、それだけではおさまらず、同月二十八日には師である法然の土佐国配流の宣旨が下されたのである。九条兼実の奔走により配流先は讃岐国となり、三月十六日に出立となつた。室津の港から海へ舟で押し出したとき、遊女が舟で追いかけてきて、わが身のごとき罪深い身ではたして救われるのだろうか、と問いかけている。これに対して法然は、ただひたすら念仏せよ、と答えている。『法然上人行状絵図』に記されているところは、次の

ようである。

同国（播磨国）室の泊につき給に 小船一艘ちかつき」きたるこれ遊女かふねなりけり 遊女申」さく上人の御舟のよしうけたまはりて推参」し侍なり 世をわたる道まち／＼なり いかなるつみありてか かゝる身となり侍らむ この「罪業おもしき身 いかにしてかのちの世たすか」り候へきと申ければ 上人あはれミての給」はく けにもさやうにて世をわたり給らん」



図1 『法然上人行状絵図』 巻34 第5段

罪障まことにかろからされハ 報酬またハか」りかたし もし かゝらすして 世をわたり給」ぬへきはかりことあらは すみやかにその」わさをすて給へし もし餘のはかりことも」なく 又身命をかへりみさるほどの道心いまた」おこりたまはすはたゝそのまゝにて もはら」念佛すへし 弥陀如来ハ さやうなる罪人の」ためにこそ 弘誓をもたてたまへる事にて」侍れたゝふかく本願をたのミて あへて卑下」する事なかれ 本願をたのみて念仏せハ」往生うたかひあるましきよし ねんころ

に」をしへ給ければ 遊女随喜の涙をなかしけり

この『法然上人行状絵図』の遊女教化の話は著名であり、絵と詞書はさまざまな分野の研究者に引用されている。

『法然上人行状絵図』は、法然絵伝の中でもっとも浩瀚なものであり、巻数四八、段数二三五段を有す。その撰者と製作については、江戸時代中ごろの忍濃が記した『勅修吉水円光大師御伝縁起』<sup>9)</sup>に、後伏見上皇が叡山功德院の舜昌に勅して、法然門人の記録する数部の旧伝を集めて大成させたことあり、徳治二年（一二三〇）より一〇年かかって完成したといわれる。

『法然上人行状絵図』の詞書と絵との関係に適切でない箇所が存在することはよく知られている。島田修二氏は絵を中心に検討され、絵がA・Lの十数名の画家に分類でき、A・B・H・I、それぞれ邦隆・長章・行光・維久が主作家であり、絵の大半を描いているものの、そこに規則性がないようであること、また各巻には筆者が変化するように、質の違う料紙がこれまた秩序なく一巻の中に入り乱れていると指摘。またそのことより、『法然上人行状絵図』の絵が他の絵巻を改変することにより成立した、といわれた。<sup>10)</sup> 法然の伝法絵は、初期「伝法絵」である『善導寺本』『国華本』、そしてその影響下に製作された『高田本』『弘願本』、さらにそれら諸本をふまえたうえで製作された『琳阿本』『古徳伝』『九巻伝』等がある。前述の結論として島田氏は、『法然上人行状絵図』よりも早く成立した法然絵伝の諸本にはなく、『九巻本』『法然上人行状絵図』とだけにみえる段があることより、A・Bの絵が『九巻伝』の絵図であったことはほぼ疑いがないと思う、

と述べられる。『法然上人行状絵図』巻三四の流罪途次の絵は、島田氏の分類ではB（長章）の手によるものになり、島田氏の結論を受け今堀太逸氏は、詞書と絵の内容を照らし合わせ、『法然上人行状絵図』の法然の船に遊女の小舟が近づく絵は、『九卷伝』の法然と遊女の話にもとづいて描かれたものだということになる、と述べられた。また、法然の遊女教化の視点に着目、詞書が法然の生きた事実を反映したものだという従来の考えを否定され『九卷伝』の成立した十四世紀初頭のものであると述べられたのである。<sup>(11)</sup>

『法然上人行状絵図』が後世の所産であり、またその詞書が『九卷伝』の成立時の事実を反映しているとして、そこに描かれる舟遊女の姿はというと、前述の中で今堀氏は、「法然の生きた時代の舟遊女の姿を描いたものであるため」、としてその絵が法然の時代の古代舟遊女の姿を留めたものであるという従来の考えについては否定されなかったのである。

法然上人絵伝はその絵画的価値においても特筆すべきものがあり、特に『法然上人行状絵図』に記される遊女の姿は、こと詳細なものであり、網野善彦氏は絵について、

浪静かな室の泊の海面に、法然上人を四国へ送る流人船がついた。船内には七十五歳の老上人、共の僧侶、護送する官人たちが座し、極楽往生の教えを求めて漕ぎ寄せる遊女の「小端舟」を静かに見守っている。垂髪・作眉で小桂・緋の袴を着け、小脇に鼓をかかえた遊女。その後ろにひかえる「簀かざし」の女と、艀をおす「艀取女」の二人は垂髪を元結で束ねている。『梁塵秘抄』の歌そ

のままの情景は、水辺の遊女の活動を最も克明に描いた美しい場面である。<sup>(12)</sup>

と評し、小峯和明氏は、『遊女記』の記述について、

遊女の光景で必ず描かれるのは著名な『法然上人絵伝』にみるように、舟に乗ってかざす笠であった。<sup>(13)</sup>

として、この『法然上人行状絵図』の絵が、『梁塵秘抄』や、『遊女記』といった時代の遊女の姿を留めるものとして記述されている。

先にのべられた『梁塵秘抄』の歌<sup>(14)</sup>とは、

遊女の好む物、雑芸 鼓 小端舟 簀翳 艀取女 男の愛祈る百大夫  
である。

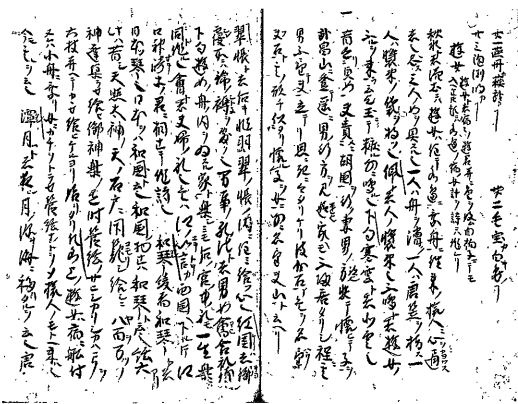


図2 『和漢朗詠注』(国会本)

『梁塵秘抄』は後白河法皇により「上達部 殿上人は言はず、京の男女、所々の端者、雑士 江口神崎の遊女、国々の傀儡子、上手は言はず、今様を謡ふ者」たちから苦心して伝習・編纂されたものであり、現在はその一部を遺すのみではあるものの、遊女の謡い手としての役割を伝えまたその

生活を知るものとして重要な資料である。確かに『法然上人行狀繪圖』に見る遊女に關しては、一見して網野善彦氏の述べられる如く、『梁塵秘抄』の表記を如実に表したものであると言える。しかしながら、それは従来『梁塵秘抄』の文句を絵に照らし合わせた結果であり、「好む」という表現からしてもその様相は、はつきりしないものである。また、当時の遊女に關する『遊女記』等の断片的な記述の寄せ集めでもって法然上人繪伝に描かれる遊女が『梁塵秘抄』が著された当時の遊女の姿をとどめるものであると判断するのにはもう少しの考察が必要に思われる。そこで、遊女の姿をより明確に書きとめる資料について考え、またそのことによって今まで、殆ど明確にされてこなかった遊女の一行への具体的な定義を行いたい。

## 二

『梁塵秘抄』に近い時代の記述を含むと考えられるのが『和漢朗詠集』巻下雜「遊女」への題注を含む、国会図書館蔵『和漢朗詠注』（以下国会本とする）。「遊女」である。その本文は以下である。<sup>(19)</sup>

遊女ト者、宿々ノ遊君、并ニ、色ヲ好ム白拍子ヲモ入ヘケレトモ、  
題ニハ、水辺ノ宿ノ女計ヲ、詩ニハ作レリ。  
秋水ト者、漢土ニハ、遊女ハ、住テ水辺ニ乗舟ニ、往来ノ旅人ニ心ヲ通  
者也。必ス三人ノ女ヲ具スル也。一人ハ舟漕。一人ハ唐笠指。一  
人ハ装束ノ袋ヲ持ツ也。佩ト者、人ノ装束也。不鳴ト者、遊女ノ不來  
云歟。玉ニテ粧ル故ニ、鳴也。下句、寒雲、者、北雲也。

一昔、有リ貞女。夫、責ニ胡國ヲ行ク。妻、男ノ方悲テ、懷ヒテ子  
ヲ武昌山ニ登テ、遙ニ男ノ行方ヲ見追。家ヘモ不帰、居タリシ程  
ニ、其男、不望テ夫一立テリ。思死ニタタリケリ。彼、成石ト。  
是ヲ名望夫石ト。其ノ形チ、似ニ懷ル子ヲ女ニ。故ニ、名望夫山ト云  
ヘリ。

藤原公任の選んだ『和漢朗詠集』には、大江匡房による所謂朗詠注を始めとして、数多くの古注釈書が作られている。黒田彰氏は、室町時代以前のそれらを七系統に分類しておられ、その中の一つに見聞系朗詠注諸本を挙げ、またその中に六本が含まれることを述べられる。<sup>(17)</sup>ここで注目すべきは国会本である。

国会本は奥書によれば、寛永七年（一六三〇）宗円が慶深の本を写し、さらに寛永二十一年（一六四四）宗順がそれを書写したものと云うことになる。見聞系諸本中、唯一の完本である。

見聞系和漢朗詠注の風俗史的資料としての有用性は、黒田彰氏が、『平家物語』巻一「吾身榮花」の中の桜町中納言譚をめぐって、

国会本朗詠注を見ると、桜町中納言譚が、千秋万歳の語り伝えた前史はともあれ、一度、幼学、注釈書における子の日の縁起といった水準に、書き留められていることがわかる。そして、その地平は、軍記物語が形成されてくる地平ともごく近い。例えば太平記の驪姫譚は一面、春季、寒食の縁起なのである。また、桜町中納言譚を含む、平家物語「吾身榮花」にしても、読み本系の幼学、注釈書との関わりは前述のごとくであり、現に盛衰記など朗詠注に取材することはかつて述べたことがある。平家の桜町中納言譚

にせよ、能『泰山府君』にせよ、この地平から拉し去られていった可能性がある。

とし、また

鎌倉期の資料としては、名語記七、参語集二、塵袋七等があるが、平安期のものとしては、藤原明衡の新猿樂記序に「千秋万歳之酒禱」などと有るくらいであり、芸能史の研究上、貴重な資料と思われる、

とし、その価値を早く挙げておられる。小稿で問題とする遊女の様相を明確にする上でも、見聞系『和漢朗詠注』は重要な資料であると考えられる。

国会本の写本は寛永のものであるものの、国会本の「遊女」、住<sup>テ</sup>水<sup>ミヅ</sup>辺<sup>ニ</sup>乗<sup>リ</sup>舟<sup>フネ</sup>、往来<sup>ノ</sup>旅<sup>リ</sup>人<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>通<sup>カ</sup>者<sup>モ</sup>也。必<sup>ス</sup>三<sup>人</sup>ノ女<sup>ヲ</sup>具<sup>ス</sup>ル也。一<sup>人</sup>ハ舟<sup>ヲ</sup>漕<sup>フ</sup>。一<sup>人</sup>ハ唐<sup>笠</sup>指<sup>ヲ</sup>ス。一<sup>人</sup>ハ装束<sup>ノ</sup>袋<sup>ヲ</sup>持<sup>ツ</sup>也。」の記述は、『法然上人行状絵図』に描かれた古代水辺の遊女の姿と驚くほどに一致するのである。国会本は近世初期の写本ながら、見聞系朗詠注は室町写本の天理図書館吉田文庫蔵天理本、平安末期写本の知恩院蔵知恩院本へと溯り、遊女はそれらの諸本の欠巻となつてることが惜しまれるものの、国会本の内容は院政期まで溯るものと考えられる。その理由は次に述べる黒田彰氏の指摘にある。

黒田彰氏は、見聞系諸本に関し、次のように指摘しておられる。<sup>(19)</sup>

(三) 身延本以下の諸本にあつては、知恩院本、天理本序注部は分割され、各々本文注内にある題下や、本文注の中へ取り込まれてしまふのである。例えば、知恩院本、梅の題注、

梅 大<sup>ユ</sup>庚<sup>ト</sup>嶺<sup>ト</sup>云山<sup>ニハ</sup>、純<sup>ニ</sup>梅<sup>ニ</sup>限<sup>リ</sup>有<sup>リ</sup>。花<sup>ノ</sup>時<sup>、</sup>木<sup>毎</sup>有<sup>リ</sup>。故<sup>、</sup>毎<sup>木</sup>ト書<sup>ス</sup>也

は、(四)東大本、梅の題下へ移され、

梅ノ事 大唐<sup>ニ</sup>大庚嶺<sup>ト</sup>云山<sup>ハ</sup>、純<sup>ラ</sup>有<sup>ニ</sup>梅<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>。木コト<sup>ニ</sup>梅ナレハ、

梅ノ字<sup>ハ</sup>、木コトニト書タリ

とされているし、(五)京大本では、梅の第一句「白片落梅」注末に移され、

大唐大庚嶺山に、余木も無して、梅木のみある故に、毎木と書て、梅と読也

とされ、(六)国会本では、梅「青糸絳出」注末に置かれるといった按配である。

同様に国会本の「遊女」に移し替えて、この注と対応する和漢朗詠集の部分と対応して考え、知恩院本、天理本の語中の本文注内への挿入を確認するに、知恩院本の「擣衣」の題注に、<sup>(20)</sup>

擣衣 楚国<sup>ヨリ</sup>、八月十五日、白練絹<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>来<sup>リ</sup>王<sup>ニ</sup>奉<sup>ス</sup>也。其<sup>ヲ</sup>ソノ夜<sup>ノ</sup>内、必<sup>ス</sup>布<sup>月ノ</sup>光<sup>ニアテ</sup>、此<sup>ヲ</sup>ウツナリ。

とあるのは、国会本には、<sup>(21)</sup>

擣衣

北斗<sup>ト</sup>者<sup>、</sup>七星也。北辰<sup>ト</sup>モ云也。初カリノ、北<sup>ヨリ</sup>南<sup>ヘ</sup>来<sup>ル</sup>ヲ、北斗<sup>ノ</sup>星<sup>ニ</sup>見<sup>テ</sup>当<sup>テ</sup>、見<sup>レ</sup>ハ、横<sup>ニ</sup>旅<sup>ノ</sup>鴈<sup>ニ</sup>カト見<sup>ス</sup>也。南楼<sup>月</sup>者<sup>、</sup>内裏ノ月也。楚国<sup>ニハ</sup>、八月十五夜<sup>ニ</sup>、南楼<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>テ、擣衣<sup>ヲ</sup>、奉<sup>ニ</sup>国<sup>ノ</sup>王<sup>ニ</sup>也。

擣<sup>ウチ</sup>処<sup>、</sup>衣<sup>ハ</sup>、必<sup>ス</sup>月<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>擣<sup>シ</sup>時<sup>ハ</sup>、閏<sup>メヤ</sup>ノ月<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>入<sup>テ</sup>、冷<sup>ク</sup>思<sup>シ</sup>シカトモ、其<sup>ノ</sup>衣<sup>ヲ</sup>裁<sup>テ</sup>、寒<sup>寒</sup>雲<sup>ノ</sup>寒<sup>ニ</sup>キレハ、暖<sup>カ</sup>ナルトナリ。寒<sup>寒</sup>雲<sup>ト</sup>云

心ハ冬ハ北ニアタル故ニ、北方ノ雲ノサムキニキルト也。又云、擣処ト者、曉マテ、擣衣ヲ、為スレハ臥、閨漏月ノ光指入、寒事愁フル也云々。

というように、知恩院本の題注は、分割される形で、注内に入っており、他に「郭公」などにも、注内に入りこんだ例が見られた。

これらをもても、遊女の「住テ水辺ニ乗舟ニ、往来ノ旅人ニ心通者也。必ス三人ノ女ヲ具スル也。一人ハ舟ヲ漕ク。一人ハ唐笠ヲ指ス。一人ハ装束ノ袋ヲ持ツ也。」は天理本または天理本序注部と類するものが本文注に取り込まれた形であると考えられる。

天理本は序に対する注のみを有するものであり、その成立に関して黒田彰氏は、

少なくとも知恩院本、天理本（序注）は、知恩院本の書写年次からして、鎌倉初期、おそらく院政期へと溯ろう。

としておられ、国会本は近世初期の書写ながら、この部分は院政期まで溯るものと考えられる。また、右の遊女の注が、近世に出現したものでないことは、見聞系を引く書陵部本系にその注が見られることから傍証される。

さてここで、国会本の

遊女ハ、住テ水辺ニ乗舟ニ、往来ノ旅人ニ心通者也。必ス三人ノ女ヲ具スル也。一人ハ舟ヲ漕ク。一人ハ唐笠ヲ指ス。一人ハ装束ノ袋ヲ持ツ也。

について詳しくみていきたい。

「遊女ハ、住テ水辺ニ乗舟ニ、往来ノ旅人ニ心通者也。」とは、新猿蓑記には

昼荷簪任身上下之倫、夜叩舷懸心往還之客  
また『本朝文粹』にも、

維二舟門前、遅二客河中、

先の『梁塵秘抄』には

遊女の好む物、雑芸 鼓 小端舟、簪翳 艫取女 男の愛析る百大夫

である。

水辺の遊女は水辺に住み、舟上にて客との「宴会」を果たしたようである。またこのことは『本朝文粹』に

翠帳紅閨 万事之礼法雖異、舟中浪上、一生之宴会是同。

に付される岩波新大系の頭注、

舟の中 浪の上で契りを交わすことは。

とあるように、この部分によくあらわれている。

さて国会本の中で、最も重要と思われるのは「必ス三人ノ女ヲ具スル也。一人ハ舟ヲ漕ク。一人ハ唐笠ヲ指ス。一人ハ装束ノ袋ヲ持ツ也。」である。「必ス三人ノ女ヲ具スル也。」とは、いわゆる客と宴会を果たす遊女の他に、連れ立つ三人がいたことを示している。その内容は、「一人ハ舟ヲ漕ク。一人ハ唐笠ヲ指ス。一人ハ装束ノ袋ヲ持ツ也。」とあり、それぞれの役割を持ち、『本朝文粹』にもあるように、「以為三己任。」したのである。中でも、「袋ヲ持ツ」は、大変珍しい表現であり、別に考える必要があるため、後に述べることとし、先に「舟ヲ漕ク」「唐笠ヲ指ス」を見てみる。

「舟ヲ漕ク」「唐笠ヲ指ス」は、『本朝文粹』に

老者担簪擁棹

と、「簪」と「棹」が示され、『新猿樂記』に<sup>(27)</sup>

昼荷簪任身上下之倫、夜叩鼓懸心往還之客

と「簪」が表記される。『遊女記』には、<sup>(28)</sup>

舳取登指

とある。『遊女記』の「登指」については思想大系補注に誤写の可能性が指摘されている。思想大系補注を見ると、<sup>(29)</sup>

「指」は「指」の誤りで、高い柱を意味するか。或いは「簪楫」の誤りで、大笠と棹を意味するか。<sup>(30)</sup>

としており、これに対して小峯和明氏は、

「登」は大笠を意味する「簪」とみてよいだろう。とすれば、やはり「指」も「楫」の誤写とみなせようか。大笠と楫、これが遊女の風景だった。以言の「見遊女」にも、『高野山御参詣記』にも、笠と棹が対になって出てくることからみて、笠と楫または棹が連語としてあったことは充分想定できることであろう。『梁塵秘抄』歌も同様である。

と述べておられる。『遊女記』にも「簪」と「楫」の表記があると考えられるのである。小峯和明氏が、「大笠と楫、これが遊女の風景だった」<sup>(31)</sup>と述べられるように、遊女の風景として登場する「大笠と楫」、そういった遊女の必需品を国会本の記述は遊女に具される人々の役割として明確に表したものと考えられる。ここで、『法然上人行状絵図』に立ち返れば、国会本に具される人として明記され、「遊女の好む物」に挙げられる「簪翳」と「舳取女」がまさにその任を担っている姿を

絵の中に見ることができる。国会本の遊女の注と『梁塵秘抄』との表記とをあわせて見れば、『法然上人行状絵図』は、『梁塵秘抄』の描かれたのに近い時代の遊女の姿をとどめるものと言えるであろう。

### 三

さて、国会本に描かれる「一人、装束ノ袋持也。」については、遊女の記述を有するどの文献にも登場せず、遊女との関連から指摘されたことは管見の限りにはない。また遊女を描くどの絵にも確認することができないのである。では、この「袋持」とは何か。

時代は少し下るものの、『武家名目抄』(職名部付録廿一)<sup>(32)</sup>にその表記がある。

袋持 今川大双紙云 主人の御袋を持事

とみることができ。保立道久氏は、

中世ではこのような男は「袋持」とよばれており、それは第一に、主人に奉仕する従者のスタイルの一つであった。

と述べておられる。<sup>(33)</sup>

「袋持」に関して、保立氏が絵画に見る「袋持」の姿から、「中世社会ではある程度の一般性をもって存在していたとすることができ。」「と述べておられるものの、文献資料に登場することは稀である。絵の中には、すでに『伴大納言絵詞』の中巻にあらわれている袋を「大袋」といい、それを担ぐ「袋持」を保立氏は指摘しておられ、その中身も宿直の衣類などを詰めたものであった、とされた。<sup>(34)</sup>「袋持」



の姿は『粉河寺縁起』の讃良長者の門出の場面、また『一遍聖絵』巻七、等に見ることができる。

国会本に書かれた「袋持」とはおそらくこれに類するものであると思われる。またもし、そうであるならば同時に、文献資料に姿を表すものとしては江戸以降の数例であったものの、一例として加えることができるし、また「袋持」を担うものが遊女につきしたがったという、大変興味深い記述となり得るのである。

## おわりに

国会本に記される「一人ハ舟<sup>フナ</sup>漕<sup>フナ</sup>。一人ハ唐笠<sup>カラガサ</sup>指<sup>サス</sup>。一人ハ装束ノ袋<sup>フクロ</sup>持<sup>ツ</sup>也。」については以上見てきたとおりであるが、注意しておかななくてはならないのは『本朝文粹』に「老者担<sup>ツ</sup>簀<sup>ササ</sup>擁<sup>ヨウ</sup>棹<sup>セウ</sup>」とあるように、一人で二つの任を担う例も見られ、必ずしも一人が一役を担ったわけではなく、そこには仕事を兼ねるといったこともあったのであろう。したがって必ずしも遊女と三人の従者で行動していたわけではなく、『法然上人行状絵図』絵には三人であったように、遊女一行の人数は一定していなかったように考えられる。

以上見てきたように、他の文献に散見する記述や、『梁塵秘抄』の「好む物」という表現に続く遊女の記述と絵との照らし合わせの中に理解されてきた遊女一行が、どのような役割を担うものによって形成されていたか国会本の記述によってその定義が具体的なものとなったのではないかと考え、また表記上の登場がほとんど確認されていないか

った「袋持」についても、時代を溯り、明記されている可能性について述べられたのではないかと考える。

## 〔注〕

- (1) 滝川政次郎氏『遊女の歴史』（日本歴史新書、至文堂、一九六五年）、『遊行女婦・遊女・傀儡女―江口・神崎の遊里―』（日本歴史新書、至文堂、一九六五年）
- (2) 網野善彦氏「中世の旅人たち」（『日本民族文化体系第六〇漂着と定着』、小学館、一九八四年）、「検非違使の所領」（『歴史学研究』五五七、一九八六年六月）
- (3) 後藤紀彦氏「辻君と辻子君」（『文学』五二、一九八四年三月）、「遊女と朝廷・貴族」（『週刊朝日百科日本の歴史中世一』③遊女・傀儡・白拍子）朝日新聞社、一九八六年）
- (4) 五来重氏「中世女性の宗教性と生活」（『日本女性史』第二巻、中世、東京大学出版会、一九八二年）
- (5) 脇田晴子氏「中世における性別役割分担と女性観」（『日本女性史』第二巻、中世、東京大学出版会、一九八二年）
- (6) 脇田氏は「日本中世都市と領主権力」（『日本中世都市論』東京大学出版会、一九八一年）の中で、「傀儡子の集団は何の支配にも服さないことを特色とした」とし、また、「天皇支配権とは結びつかぬ『化外の民』である」と述べられた。その後、「中世における性別役割分担と女性観」（前掲注5）では、傀儡や遊女を「支配外の民」としつつ、「平安・鎌倉期、それほど賤視されたとは考えられない」とされる。
- (7) 網野善彦氏「中世の旅人たち」（前掲注2）

- (8) 引用本文、及び口絵は『新修 日本絵巻物全集』第一四巻(角川書店、一九七七年)による。
- (9) 忍漱『勅修吉水円光大師御伝縁起』(浄土宗全書 第一六巻)
- (10) 島田修二郎氏「知恩院本法然上人行状絵図」(『新修 日本絵巻全集』第十四、前掲注8)
- (11) 今堀太逸氏「法然の絵巻と遊女」(中世史研究選書『神祇信仰の展開と仏教』、吉川弘文館、一九九〇年)
- (12) 網野善彦氏「遊女と朝廷・貴族」の口絵解説本文による。(前掲注3)
- (13) 小峯和明氏「大江匡房の遊女記」(『中世文学研究』第二〇号、一九九四年六月)
- (14) 『梁塵秘抄』巻第二(岩波新古典文学大系)
- (15) 『梁塵秘抄口伝集』巻第一〇(前掲注14)
- (16) 『和漢朗詠注』(『和漢朗詠集古注釈集成』第二巻上、大学堂書店、一九八九年)
- (17) 黒田彰氏「中世注釈史一斑―見聞系朗詠注について―」(『中世説話の文学史的環境 続』、和泉書院、一九九五年)
- (18) 黒田彰氏「中世注釈史一斑―見聞系朗詠注について―」(前掲注17)
- (19) 黒田彰氏「中世注釈史一斑―見聞系朗詠注について―」(前掲注17)
- (20) 知恩院本『倭漢朗詠注』(前掲注16)
- (21) 国会図書館本『和漢朗詠注』(前掲注16)
- (22) 黒田彰氏「中世注釈史一斑―見聞系朗詠注について―」(前掲注17)
- (23) 『新猿楽記』(岩波思想大系『古代政治社会思想』)
- (24) 『本朝文粹』巻第九(岩波新日本古典文学大系)
- (25) 『本朝文粹』巻第九(前掲注24)
- (26) 『本朝文粹』巻第九(前掲注24)
- (27) 『新猿楽記』(前掲注23)
- (28) 『遊女記』(前掲注23、岩波思想大系『古代政治社会思想』)
- (29) 『遊女記』(前掲注28、岩波思想大系『古代政治社会思想』)
- (30) 小峯和明氏「大江匡房の遊女記」(前掲注13)
- (31) 小峯和明氏「大江匡房の遊女記」(前掲注13)
- (32) 『武家名目抄』第二職名部付録二一(今泉定介氏編『故実叢書』)
- (33) 保立道久氏「大袋」の謎を解く―領主の暴力と拘禁―」(『中世の愛と従属』、平凡社、一九八六年)
- (34) 保立道久氏「大袋」の謎を解く―領主の暴力と拘禁―」(前掲注33)

(なかむら なおみ 文学研究科国文学専攻修士課程)

(指導・黒田 彰 教授)

二〇〇七年九月二十五日受理